

社会変化に対応する主体性の問題

—アイデンティティ・自律性・自己生成的人間—

On Subjectivity in Changeable Society

—Identity・Autonomy・Man as a Becoming—

高橋 洸 治
Kôji TAKAHASHI

（平成5年10月12日受理）

1. オートポイエシスの視点

「オートポイエシス」とは、ギリシア語で、「自己生産」のことである。「自己創出」とか、少し読み込んで「自己再生産」とかの訳語がみられるが、学説的には片仮名表記が通用している。それは本来的には生物学的な概念として使用され始めたものである。すなわちこの概念は、〈生物とは自律的な単体である〉ということの提言であった。「生物のもっとも明らかな特徴のひとつがその自律性だということは、いえる。……オートポイエシスが、生物を自律的システムとして特徴づけている」^①。オートポイエシス組織は、生物の単体をして、自己を実現し、自分自身のダイナミクスによって環境から区別されるものとして自己を構成させるのである。

オートポイエシス組織は、その構成要素を他の構成要素によって再生産する円環的な組織であり、この円環的な因果関係において再帰的に（リカーシヴに）自己に関わり自己を、組織を維持、再生産するのである。自己が自己に関わる作用は、「自己言及性（selfreference）」と呼ばれる。オートポイエシス組織の作動形式であるこの自己言及性は、組織内部で形成された情報の処理によって、選択的に新しい可能性を創りだすことができる。つまりこの組織は、作動的（operational）には閉じられており、エネルギー的には開かれているのである^②。

自己組織性、作動的に言えば自己組織化の概念と理論は、このオートポイエシスの原理のもとで、新たな段階にはいり、社会や人間を自己組織化の視点から捉え直す試みが展開されるようになったのである。自己組織化の理論は、〈自律性を科学的に基礎づける理論〉としての役割を引き受けることになってきている。「自管理の問題から、地方の自律、エコロジー運動からイヴァン・イリッチ流の他律性への批判に至るまで、社会的、政治的権利要求のすべてが、その要求を科学的に正当化するものとして自己組織化の理論に主張の理論装置を見出ししている」^③のである。

教育の本来的な目的とされる「人格の完成」というのは、個人が他者から識別され得る独自の諸特性を統合された全体性へと高めることと、解することができよう。その「統合された全体性」が、自己組織性の問題と関連していることは言うまでもない。人格は、行為的・実践的にみれば、「主体性」属性を有するものである。個人が、自己の内部特性に基づいて、社会の

外部特性と関わることによって、自己自身および社会集団との二重の関係を獲得し、それら両者の関係が一定の適恰的な調和を有している場合に、自我同一性、アイデンティティーが、自己統合性が確保されている、とされる。それゆえ、安定した確固たるアイデンティティーの確立は人間形成における重要な課題と考えられている。アイデンティティー形成は青年のみならずすべての人々にとっての課題となりうるものである。

しかし、変動性・流動性を特徴とする今日の社会においては、アイデンティティーの捉え直しが求められている。そのことは同時に、社会と個人との関係、ひいては社会化理論に偏重した教育理解、要するに主体性・自律性についての再考をせまるものである。そうした問題点の考察は、従来の教育学思考を変容させることが必要か否かを検討させる動因の一つとなるであろう。そして、その際の検討を方向づけるものとして仮説的に想定されているのは、オートポイエシス原理に依拠する「自己組織化」、「自己言及性（自己再帰性）」のコンセプトである。

2. 〈社会化〉の問題性と可変的アイデンティティーへの転換

「社会化」という概念は、E. デュルケームによって学術用語化された（1922）。それは、自然的な人間を人々の集合態の中に組み込むことを、若者世代の同化による社会の再生産を表示するものである。その社会化の過程で、若者は社会の行動範型の内に取り込まれ、その規範を受容し内面化する。社会化は、その後、役割取得と結びつけられ、その取得過程において同時に人格的なアイデンティティーが達成されるとされている。

社会学的な概念としての社会化は、教育の過程に全体的かつ集会的な性格を付与する視点である。あらゆる個人的な特殊性は、社会化において解消されている。各個人は、社会的な人格としてのみ、すなわち他者との相互作用の中に組み込まれている役割、地位の担い手としてのみ登場する。個人は、その役割に負託されている期待によって動機づけられる。換言すれば、役割の中に含意されている規範や要請を〈内面化〉することによって、個人はみずからを動機づけるのである。ここで留意しておく必要があるのは、〈内面化〉によって外部的な規範や要請が正当化されたものとみなす安易な捉え方である。この点に関しては後で触れる。

そうした役割理論に対して、役割を失った人間は社会にとっては実在しない存在になってしまう、との異議が示されている。だが他方において、〈個人であること〉と〈役割の担い手〉とを分離することは、社会に対する〈私的な自由という概念〉を許容することになり、個人が社会的現実と接触する可能性を衰弱させるものである、との指摘もある⁴⁰。

役割とアイデンティティーとを積極的に結びつける試みとして、〈役割づくり rolemaking〉概念が提起されている。単なる役割取得に、〈受容された役割の新たな形成〉としての「役割づくり」を対置させたのである。その役割づくりは、与えられた役割をどのように解釈するかに係っている。解釈の在り様によって、役割受容の堅固さの度合いや役割内容の変様の程度に相異が出てくることになる。そこにおいて、個人的で個性的なアイデンティティーの可能性が想定されたのである。

しかし、解釈によって役割を一定の意味づけで粉飾しても、社会機能的に規定された役割の性質や、役割理論に内在する基本原理は消滅しないのである。役割理論には、統合化の原理と画一化の原理とが含まれている。それらの原理の下での社会的な役割の〈内面化〉は、行動の有効な制御の受容にはかならない、と指摘されている。要するに、役割の獲得は社会規範の獲得なのである。しかも、そこにおいては、社会の安定性が前提とされていたのである。

今日、社会の高度情報化への進展において、人々の行動原則やエトスは大きく変様しつつある。情報革命により脱工業化へと進み、社会構造に変動が生じ、文化、社会規範の更新が迫られている。工業社会を支配していたエトスは、同時性、標準性、集権性、集中性であり、それらのもとに、教育は、時間厳守、画一化教育、既存秩序への順応性、集中力の向上を目指してきた。そして程度の差はあれ、規則正しく、没个性的で従順な、均質な能力を有する人的資源が量産されてきたのである。しかし、脱工業化の現在における支配的なエトスは、創造性、自律性、個性であると指摘されている（A. トフラー）。

新たに前面に出てきた創造性、自律性および個性といったエトスは、標準性等の統制的・拘束的なエトスとは異なり、むしろ解放的に開かれ、個人特性に関わるもので、いわゆる社会的な規範とは異質な面をもっていると言えよう。つまり、新たなエトスは個人の自己意識、自己概念と深く結びついたものであり、それゆえにこそ新たなエトスへの変革はその背後に自己認識の問題を問題化させる状況を産み出しているのである。

情報の生産・処理に係わる科学技術の発展と拡張化を動因とする社会変動は、今のところその帰結としての社会全体の構造を予測不可能にしている。構造的な変動の継続化に直面して、これまで安定的な構造を追究してきた社会学において視点の転換を図る試みがみられる。それは、確実に安定的な構造への固執を断ち切り、むしろ構造は不確実性、暫定性をその本質としているという見解を取るものである。それは革新的な視点である。ここにおいて、社会学は、不確実性を真正面から見つめ、それを異常性としてではなく正常性として捉えるのである。

不確実性を基本特徴とし、さらに高度な分化を遂げつつある複合社会において、人々の規範意識や欲求は多様化および流動化の度をつよめている。それによって、社会の集合体としてのアイデンティティーも個人の自我アイデンティティーも確定的なものから不確定的なものへと変様せざるをえなくなってきた。人々を方向づける安定した世界像を持ちえなくなった社会、時代のアイデンティティーは、確実に固定的なものとの関わりによってではなく、その時々々の状況に応じた内容との関わりによって達成されるものと考えるのが現実的とみなされるようになってきたのである。すなわち、〈状況可変的なアイデンティティー〉こそ変化する時代におけるアイデンティティーの形態として確認することが必要なのである⁶⁾。

個人がこの可変的なアイデンティティーを形成するための条件は、自己自身に立ち帰り自己を自省的に捉え直し、自己調節力を確保することである。つまり自己組織化の能力を獲得することである。学習能力をもち、自律的に判断し決定することができる個人が、可変的なアイデンティティーを形成することができるのである。変動する社会は、まさに、そうした主体的、自律的な人間を必要としているのであり、従ってそういう人間の育成を教育に期待していると言えよう。

社会環境の変化は、このようにアイデンティティー形成を一層困難なものにしている。大人が体現すべきはずの社会規範の変様、相対化は、大人世代を後続の若者世代にとっての対抗対象にはなりえないものとした。断絶は、世代間というよりも年齢層間へ、そしてそれぞれの趣味・関心を共有する諸グループ間へと移行している。それに応じて文化は、社会-国民文化、世代文化、特定年齢層文化（幼児文化も登場している）、趣向文化へと分化している。そうした細分化は近年のニューメディアによって促進されている。マス・コミは大量性・大衆性、同時性、一方向性を特徴としていたのに対して、パソコン等のニューメディアによるコミュニケーションは、脱大衆化（分衆化の用語もみられる）、非同時性、相互性を特徴としている。そうした

特徴は新たな人間関係、社会秩序を産み出しつつある。パソコン通信によるいわば〈目に見えない社会階層〉の出現可能性は注目すべきことと言えよう。感覚的に確認しえない人々の集団への帰属性は、従来とは異質な個人アイデンティティを成立させるであろう。

大量生産から品質重視の個性的な商品の多種少量生産や情報の多様化は、選択の幅を拡大させ、質的な豊かさの証明とみなされているが、多面においてそれは、情報社会が個人の動機構造の内にまで深く介入してきていることでもある。消費行動における主体性は、実は、社会によって情報的に制御されている、ともいわれている。

こうした社会環境、生活状況において、特に青少年にはアイデンティティの拡散化現象が指摘されている。①対人的距離の失調：他者への不自然に儀礼的な態度や熱狂的な親密さ。②時間的展望の拡散：過去に基づき現在において将来への見通しを立てることを避ける、変化への恐れ。③勤勉さの拡散：学習、作業への集中性を欠く機械的な持続。④否定的同一性の選択：身近な人がよしとする生活態度を軽蔑し、反対の否定的なことを過大評価し同一視する⁶⁾これらは、自己確立の未成熟さを示す指標とも言える。しかし、青少年の発達段階的な特性や社会環境、生活や学習の実態を考慮するならば、それらは意外な現象ではない。さらに、青少年はその後成人となってもそうした特徴を引きづってゆく可能性が非常に強くなっていることも十分予測されることである。

その拡散化現象の克服は、確定的なアイデンティティの確立ではなく、可変的なその形成に求めざるをえないであろう。可変的なアイデンティティの視点を取るということは、オートポイエシスの自己組織化という人間的性能を開発することである。それは、個人の自律的な自己生産（創出）性を向上させることである。その考察の前提として、人間を〈生成的な存在〉として捉える見解と、自律性概念について検討することが適切であろう。

3. 自律性の必要条件

自律性は、人格を構成する中枢的な要件である。人格を発展させることは、教育が目指すべき理想であるとしても、これまで教育の直接的な目的とはされていない。それは、従来、教育の主要な機能は、諸世代を統合する集団的な表象体系である共通の認識、規範意識の内に諸個人を導入して国民を育成することにある、と考えられてきたからである。それに、人格の要件である自律性は、国家・社会への帰属性を要件とする国民概念とは相入れない要素があるとみなされていたことも、挙げられる。しかし、すでに指摘されたように、変化・流動性を通常態とする今後の社会状態を顧慮するならば、各個人の自律性を発展させることは、現在の教育が直面している具体的な課題である。自律的な個人の相互作用を要因にして初めて自律的に生成発展する社会は形成されるものだからである。

自律性は、一般に、ルールと結びつけて説明されている。例えば、ルールを〈自分のもの〉にしてゲームに興じている子供は、ゲームにおいて自律的である、とされる。たとえそのルールが大人から与えられたものであっても、仲間によって認められていればよいのである。この捉え方をもとにして自律性について考察してみよう。いくつかの問題点が取り出される。自律性はどのようにしてルールと結びつけられるのか。何にも拘束されない自由とか自立性とは同じか否か。ルールは、自分自身でオリジナルにつくらなくてもよいのか。そして、他者から与えられる外部的なルールを〈自分のもの〉とすること、すなわち〈内面化〉するとはどういうことなのか。それら検討を通して自律性の特徴が解明されるであろう⁶⁾。

まず最初に、自律性と自由、自立性との相異について。自由は消極的な概念であり、自分が欲することに関しての制限や拘束がないことである。自由は自律性の十分条件ではない。というのは、自律性は自己指導（self-direction）や選択の要素を内に含んでいるからである。例えば学習の自由は与えられていても、学習のイニシアティブがない場合もある。学習において自律性の行使を励ますならば、学習内容等の選択の自由が認められなくてはならない。つまり、自由は自律性を行使するための必要条件である。しかし、自律性を発達させるための必要条件とは言えないであろう。自律性の発達、ピアグループ等他者からの外部的な指示など経験的な要素とも結びついているからである。

自立性（independence）ないし自主性は、動機付けに関して他者に依存していない状態のことである。教師への恐怖心とか賞罰へのこだわりから学習するのは、自主的ではない。自立性は、他者や物事に対する個人の外的な係わりに関する事柄である。自律的な主体は、動機付けでの自立性をもつ必要はあるが、しかしそれと同一視することはできない。

ただし、オートポイエシスの視点から、動機の問題に対して新たな注目がなされていることを押さえておかななくてはならない。不確実性の時代が到来し、社会科学の手法の伝統的な支配的パラダイムの動揺化のもとで、社会的なものを無条件に現実的な統一体とみなす暗黙のコンセンサスが疑問視され、社会化の社会的条件付けの力が相対化される。それに伴い、主体の哲学への回帰がみられ、個人が自己の行為を再編し方向づけるのを支える〈自省的な動機〉が重視されるようになってきているのである。

自律性の積極的な意味は、〈理性〉との関係において捉えられる。思考し、行為することが、本人自身の〈精神の活動〉と関連づけて説明されうる場合に、その人は自律的と言える。その精神活動とは、〈選択、熟慮、決定、反省、判断、計画、推理〉である。思考と行動が、強制、条件付け、インドクトリネーション、承認していない権威によって支配されている時、人は他律的なのである。外部から取り入れた内容はそれらの精神活動と関わらせることによって〈内面化〉されるのである。だから、思考・活動はオリジナルでなくてもよい。自分が従うルールもそうである。学問的に独自の見解や理論を提示できる知的な人間だけが自律的なのではない。また、人の思考や行動は本人自身の精神活動に関連づけて説明しつくせないのも、自律性というのは絶対的なものではないのである。

ここで〈内面化〉に関してもう少し触れておこう。〈内面化〉、〈内面性〉は一見〈内向性〉と同義のように見えるが、そうではない。D. リースマンは内向的な人間を自律的な人間とは区別している。彼によれば、〈内向性〉は〈他者志向〉の特殊なケースである。他者の指示的な影響が、幼児期に強制的な形で取り込まれ、その指示に従うことがいわば自分自身の衝動となってしまう場合に、その人は〈内向的〉と呼ばれるのである。

自律性を成立させる不可欠な要件である〈内面化〉は、人間精神の本質的な特徴である〈内面性〉の意識を前提にしていることは言うまでもない。内面性の意識とは、個人が自分の生きていることの意味と、自分と関わる環境世界の意味とを問い、また両者の関連について配慮し省察することである。

さらに、〈内面化〉との親近性がみられる〈受容（性）Rezeption〉について。〈内面化〉は、外部的なものを単に内に取り込むのではなく、それを自分の精神活動で媒介的に再構成することであることは、すでに指摘されたことである。しかし、その際留意しなくてはならないの

は、精神活動が固定的な方法原理に基づく客観性に固執するあまりに人間の主体性を、そして個人の主観性を消去してしまうことがないようにすることである。その視点から、近年、例えば〈受容性〉が新たな方法概念として捉えられている。それは、作品の理解において主観的な条件とされる〈解釈の仕方の働き〉を重視するものである。それにより受動的な受容から能動的、生産的な受容への転換が意図されているのである⁷⁰。

自律性を基礎付けている精神活動である理解、選択、決定などが間違っていたり、それらの規準が不適切である場合、その個人は自律的ではないのか、否か。これは学習に発見的な手法を採用するとき、教師が直面するディレンマである。子供が自己指示的に探究活動を展開した結果、間違った解答を出したり、考慮すべきことを誤解していたりすることがある。それに対する教師の対応は難しい。けれども、基本的には、たとえ間違っていたとしても自立的に活動する構えを有するものとしての自己概念を子供自身に確認させ、強化することが大切である。間違いに関して子供を訂正するか否かについては、やはり訂正することが適切である。選択、決定などの知的活動は、対象に応じた一定の基準ないしルールを適用することによって、その知的性質を確保しているのである。だから、知的反省はその採用した基準の適否をめぐる行われるのである。その際、基準、ルールのオリジナル性にこだわる必要のないことは前で指摘されている。

基準もしくは規準のない選択ということは考えられない。採用される基準とその妥当性および適切性は、選択されなくてはならないものが何であるかに依存している。そうだとすると、採用される適切な基準は、個人の特殊な願望とか目標から独立していることになる。採用すべき基準から引き出される理由は、個人の願望を無視する形で、個人に対していわば〈強要的〉なものである。だからこそ、実存主義者は〈基準のない自律性〉とか〈理由のない自律性〉を要求するのである。

基準およびそれから引き出される理由づけの強要的な性格は、人間の理性そのものの特徴に由来するものである、と R. F. ディアデン（ロンドン大学教育研究所教授）は指摘している。しかし、選択の基準、理由は一方的に選択対象に委託されているとしないで、選択主体である個人の側の意味志向性と関連づけた捉え方をする必要があろう。とはいえ、基準が個人の願望から独立しているからといって、個人の自律性が侵害されているとは言えない。なぜなら、個人はその基準を採用しないことも可能だからである。要するに、どのような基準に準拠して精神活動をコントロールするのかがということが、その意味での〈自己支配〉こそが〈自律性〉の本質的な標識と言えるのである。

4. 自己生成的存在の基本的な特徴

自律性の行使における主要な必要条件についての上の考察から、自律性を形成するための教育的な基本認識、そして方法および内容を組織化する必要がある。そしてまた、それらを包括する基本的な人間理解を構成することも必要である。

自律性の必要要件を考慮して、陶冶概念を次のように規定するのが適切である。この規定は、W. クラフキーの概念規定を元にして筆者なりに部分改訂したものである。

新たな陶冶概念の規定：

① 変化する社会環境およびその中で意識的・無意識的にであれ変化させられている自己存

在と自己自身との間隙を橋渡しするために、それらに対して絶えず態度決定を遂行することにより、自己の人格を具体的に形成すること。

- ② その態度決定の拠り所となる基準（規準）を、歴史・文化・伝統との関わりにおいて追究し、自分が適用すべき基準の妥当性を吟味し選択すること。
- ③ 物事の経験、対話および行為などを通して自己を乗り越えようとする意志を育成すること。その際、同時に、自己を自省的に捉え自己概念の変容への構えを築くこと。

こうした陶冶概念が想定している人間理解は、〈生成的な存在〉としての人間である。これは C. R. ロージャズや R. H. フェニックスが提唱している人間把握である。ここでは主としてロージャズの見解に依拠して筆者なりにその人間理解の特性を明らかにしたい⁶⁾。

人間は自律的であるかそれとも他律的であるかと問えば、他律的であると応えたい。社会的存在としての人間は社会の拘束から抜け出して超然と生きることなど考えられないのである。さらに、人間は生物的な存在として遺伝子によって、そして身体的な諸要因やその疾病による制約をうけている。人間には真の自由はないのかも知れない。行動主義的な心理学の中には、〈人間が自由でないという仮説は、人間行動の研究に科学的方法を適用するために不可欠のものである。〉とさえ言い切っている。その立場から見ると、人間は機械であり、不自由なものであり、いかなる意味においても物事や自己自身に対して主体的に関与することはできない存在である。人間は外部的な意図的ないし意図されないもろもろの力によって統制されているにすぎない存在である、と捉えることができるのである。

しかし他面において、人間は〈自分自身の選択によって生きている〉という自覚をもちうる存在でもある。人間の成長・発達は自由な選択の行使によって初めて可能になるものである。要するに、人間は自由に選択し意思決定することができる存在である、と捉えることも可能なのである。

こうした両面的な人間理解に基づいて、生成的な人間存在の特徴は次のようなものとして指摘されるのである。

①「態度決定する存在」：人間の内的本質としての自由

人間はいかに厳しく拘束された環境条件の下であっても、〈人間の最後の自由〉を保持することができるものである。生死の境に追込まれた強制収容所の体験から、V. フランクルと B. ベテルハイムは、共に、極限状況ともいえる苛酷な環境の中で人間として生きのびるための条件は、態度決定を放棄しないことであると述べている。生ける屍としてではなく一個の人間として生きることを摸索した結果、「人間の最後の自由、つまり、どんな環境の下でも自己の態度を選ぶ自由を依然として保持していることを悟るようになった」⁷⁾とベテルハイムは記している。自己の態度を自主的に選ぶか否かが、〈人間性〉を持ちつづけるか、それとも精神的な植物人間になってしまうのかの分岐点となるのである。

こうした自由というのは、人間にとっての〈内的な、主体的な、実存的な自由〉である。この自由な態度決定の遂行は、その個人が自分の生きる道を選択することに他ならない。その選択により人は未知のもつ不確かさの領域に不安な一歩踏み出すことになる。不安を克服させるのは、自分自身の中から新たな意味を発見する充実感である。それゆえ、態度決定を継続的に遂行することは、自分を絶えず成長し続ける過程存在に、自己生成的な存在にするのである。

態度決定は自己決断と同義と言えよう。この自己決断の重要性を人間学の立場から強調して

いるは、M. J. ランゲフェドである。彼によれば、人格を有する人間は、いつも「自己決断する存在」であり、したがって、「存在すると同時に未だ存在しないところの、すなわち未だでき上がってしないところの誰かとして、自己自身を把握する」のである。その視点から彼は、子供を「自分にとって全てが可能性として価値をもつような人間」であると捉えている。そして、人間はみづからを決定しなければならない存在であるゆえに、まさに教育を必要とするのであり、また教育が可能である、と指摘しているのである⁽⁴⁰⁾。

②「自己自身でありうる関係を追求する存在」：役割づくりをする自由

これは通常の社会的次元における自由である。社会化の過程において人は社会に組み込まれることによって社会的な規定を受ける。その規定は具体的には帰属する集団での役割を与えられ、それを取得することにおいて作動している。役割の内容は、基本的には、集団の組織や機能、目的によって決定されており、役割の取得には強制的な拘束力が伴っている。そうした役割との自己同一視によって社会の要求を自己の要求に変換することが行われる。それが社会化の実態である。しかしその取得された役割を媒介にした人間関係は組織的かつ機能的な性質を強く帯びたものである。そこで人は、役割を解釈し直し、それに新たな意味付与をして積極的に自分から役割づくりを試みるのである。それは、役割に規定されながらも、自分らしさを求める人間的な要求に基づくものである。つまり、人間は社会的に規定されていても、自己自身を実現しようとする意欲をもつものであり、またそのために一定の自由を行使することもできるのである。

③「自己成就的予言性を有する存在」：個人的な差異を生み出す自由

心理学的研究によれば、集団の圧力に弱い人は情緒的にかたく、自発性を欠き、自分の行動と動機について十分理解していない傾向がみられる。それに対して、自分自身で選択する自立的な人間は開放的で、自信をもち、自分自身をよく理解している。そして、〈青少年たちの将来の行動は……彼らが自己自身やその環境についてどの程度現実的な理解をもっていたかによって予測されるということ〉が立証されている。これはピグマリオン効果として知られていることと関連している。

この視点から見れば、教育は知識・技能の伝達ではなく、自己成就的な個人の発達を支援することである⁽⁴¹⁾。

④「コミットメントする存在」：認識の基礎と発展方向を生み出す関与

この意味は、M. ポラニイの〈個人的知識〉を参照すれば十分に理解されるであろう。彼は知識を言語表現可能な言説知とそれが不可能な暗黙知とに区分する。暗黙知は、個人が物事に全心身的に関与することの過程において自分の心身において感知される実質的な内容である。内容といっても、未だ言語化されていないものである。その内実は個人の探究方向を規定し、一定の方法手続きを経て明示的知識を生み出すのである。したがって、この暗黙知は他者から教授伝達されるものではなく、個人の関与によって獲得される〈自分だけの固有な知〉である。要するに、〈関与の本質は、行為をとおして、暫定的な個人的真理を創り出すこと〉である。

モンテッソーリが強調する新生児の〈吸収する心〉は、暗黙知を把握する働きの原初的な形態とさえよう。〈新生児は自分を取り巻く環境の要素を吸収しつつ、自らの人格を形成していくのです〉⁽⁴²⁾との指摘は、この視点からみて、意味深いものである。

また、ランゲフェルトは暗黙知から言説知への移行を次のように述べている。例えば、高く積み上げられた積木はそれを突き崩してくれるように子供に訴えかける。そうした〈直接的訴

えかけにたいして反応すること〉の繰り返しを経て、そこから新しい〈経験の形式〉が形成され、それが〈認知〉となり、また〈言語的表現〉として立ち現れてくる、と。⁽⁴³⁾ これはおそらくポラニイの見解に基づいているであろう。しかし、一層明快な解説になっている。

自己自身への関与は、オートポイエシス理論において重視されている〈自己言及的な自省作用〉として捉え直すことができるであろう。

以上4点が自己生成的な人間存在の主要な特徴である。人間に与えられている自由の余地は人間が自律的であることを要請されている重要な領域なのである。自由とはまさに自律性への呼び掛けである。それに応えて、精神的な活動である態度決定、意思決定を遂行することによって、個人は自己を生成的に発展させる契期を成立させるのである。また、関与を遂行することによって、社会現実や物事に即して、自己展開の基本的な方向性が生みだされるのである。変動する時代においては、こうした自己創出的な人間が求められると言えよう。

生成的人間の重要な特徴である自己組織性についての究明は今後の課題とされる。

〈主要概念〉

オートポイエシス、社会化、可変的アイデンティティー、内面化、自律性、生成的存在

〈参考文献〉

- K.-D. Revermann : Konstruktion und Selbstorganisation. Peter lang, 1989.
 R. Huschke-Rhein : Systematisch-Oekologische Paedagogik. Rhein-Verlag, 1992.
 R. F. Dearden, P. H. Hirst, R. S. Peters : Education and the development of reason. Routledge & Kagan Paul, 1972. (EDR と略記)
 W. Klafki : Neue Stidien zur Bildungstheorie und Didaktik. 3 Aufl., Belz Verl., 1993.
 J. Derbolav : Grundrisseiner Gesamtpaedagogik. Diesterweg, 1987. (GG と略記)
 R. Skager : Organizing Schools to Encourage Self-Direction in Learners. Pergamon, 1984.

〈注〉

- 1) V. マトゥラーナ, F. ヴァレーラ (菅啓次郎訳) 『知恵の樹』、朝日出版社 1987、29ページ。
- 2) 今田高俊『自己組織性－社会理論の復活』創文社、1986、59 ページ以下参照
谷本憲治「〈自己組織化〉図式－オートポイエシスの視点」和歌山大学経済学会『経済理論』233、1990、41 ページ
- 3) P. デュムシエル, J.-P. デュピュイ (丹生谷貴志訳)「自己組織化－物理学から政治学まで」『現代思想』1983. 12. 91 ページ
- 4) GG, S. 162.
- 5) 山之内靖「システム社会の現代的位相(上)」『思想』No. 804、1991. 6. 参照
- 6) R. F. Dearden : Autonomy and Education, in EDR.
- 7) H. R. ヤウス「受容理論－その知られざる前史を顧みて－」『思想』No. 820、1992. 10. 6 ページ以下参照

- 8) C. R. ロージャズ (村山正治訳)「自由と関与」 ロージャズ全集第12巻『人間論』所収、岩崎学術出版社、1968 参照
- 9) B. ベテルハイム (丸山修吉訳)『鍛えられた心』法政大学出版、1975、157 ページ
- 10) ランゲフェルト (和田修二訳)『教育の人間学的考察』未来社、1996、57 ページ
同上 (岡田・和田監訳)『教育と人間の省察』玉川大学出版、1994、97 ページ
- 11) T. ブラメルド (教育人類学研究会訳)「教育的展望—自己成就的予言をめぐって」
島原宣男編『現代人と教育の危機』新泉社、1977、47 ページ以下参照
- 12) E. G. ヘインストック (平野智美監訳)『モンテッソーリ教育のすべて』東信堂
1988、88-9 ページ
- 13) 注10 同本、88-9 ページ